

機関番号：32601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520215

研究課題名（和文） 共和主義パラダイムで語るアメリカ近代化の歴史

研究課題名（英文） Understanding American Modernity on the Basis of Republican Paradigm

研究代表者

若林 麻希子 (WAKABAYASHI MAKIKO)

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：50323738

研究成果の概要（和文）：本研究では「性的差異の制度化」をキーワードに据え、アメリカ近代史をジェンダーに関する女性の意識変革の歴史として再編成することを試みた。性差が「程度の差」から「種類の差」へと概念的变化を遂げる 18 世紀後半の歴史的背景に着目し、女性アイデンティティの変遷を求婚小説の中に辿った。その結果、「共和国の母」、「真の女性らしさ」、そして「家庭の天使」などの家庭性イデオロギーに回収することが出来ない新たな女性の内面性とその物語の伝統を浮き彫りにすることが出来た。

研究成果の概要（英文）：This study tried to rewrite American modern history in terms of women's identity. In the eighteenth century, the idea of sexual difference between women and men was radically altered, that is to say, sex ceased to be regarded as a matter of degree and came to be recognized as a difference in kind. I then tried to observe in women's courtship novels how this reconceptualization of sexual difference affected women's sense of themselves. The result is a history of women's desire for unmediated selfhood that resists to be silenced under the ideological pressure of domesticity.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ文学、女性文学、求婚小説、誘惑小説、感傷小説、家庭小説、共和制アメリカ、アメリカ近代化、

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の構想は、現在のアメリカ研究における共和制文化の歴史的評価の遅れに関する問題を踏まえた結果としてある。アメリカ共和制文化への学問的関心は、ポストコロニアリズム批評の隆盛を背景に 1990 年代に高まりを見せた。この時期の研究は、独立革命期から建国期へと至るアメリカの文化的特徴

を多角的に評価することに成功し、近年になって活発化しているトランスアトランティックな視点からアメリカの脱植民地化現象を考察する研究への素地を築いたことは事実である。しかし、これら既存の研究が実践する新歴史主義的な批評アプローチには、共和制アメリカの時代的特異性を明らかにすることは出来たが、アメリカの文化的成長を

より広い歴史的コンテクストの中で評価するには限界があった。例えば、共和制文化がアメリカ文化のその後の発展にどのような関わりを持ち得たかという問いに、それらの研究は答えを与えることが出来なかったのだ。このため、18世紀から19世紀への転換期にあたる共和主義時代は、アメリカ文化における、いわば、空白として取り残されている観があった。文学を例に取るならば、共和制時代から1830年代以降のロマン主義時代への移行を説明する積極的かつ具体的なパラダイムがまだ定立されていない現状が存在していたのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、建国期アメリカにおける共和制文化のパラダイムによってアメリカ近代化の歴史を語り直す試みである。アメリカ近代化の歴史は、19世紀以降の民主主義発達の歴史へと還元、単純化される傾向が強い。そこで、本研究では、アメリカにおける近代化の問題を、特に「性的差異の制度化」をキーワードとした共和制文化の流れの中で捉えなおすことによって、既存の民主主義パラダイムから切り離し、ジェンダーに関わる女性の意識改革の歴史として再編成することを具体的な目標とした。

## 3. 研究の方法

本研究は、18世紀後半において性差概念が一新された歴史的状況に着目し、その時点を起点とした女性アイデンティティの変遷を、求婚小説の中に辿るカルチュラル・スタディーズの方法に則って進められた。求婚小説は、18世紀啓蒙思想の時代にあつて、「友愛結婚」の理想にむけた女性のindividuation（個性化）の問題に取り組む文学ジャンルだと言われている。娘から妻への家庭的アイデンティティの移行のわずかな狭間で展開する女性経験をドラマ化する求婚小説を、本研究では、伝統的な家庭という女性領域に代わる新たな女性経験のトポスに据えることによって、この私秘的領域で展開する家庭性のイデオロギーを逸脱した女性たちのセクシュアル・ポリティクスの内実に考察を加えた。

## 4. 研究成果

(1) 本研究における最も大きな成果は、アメリカにおける求婚小説の伝統を、既存のアメリカ女性文学の歴史観を流動化する可能性を秘めた新たな枠組みとして獲得したことである。これまでアメリカにおける女性文学の伝統は、18世紀誘惑小説の反動として、19世紀において独自性を獲得したと考えられてきた。つまり、産業革命が背景となって、「真の女性らしさ」や「家庭の天使」といった家庭性に基礎を置くジェンダー・イデ

オロジーがその輪郭を明確にすることになったが、アメリカ女性文学は、そのような19世紀産業革命期のイデオロギー的状況の変化を受けて、Companionate Marriage（友愛結婚）へと結果的に導いてゆく、女性の主体性の問題に取り組みながら、イギリスの教養小説とも、風俗小説とも異なる、家庭小説、感傷小説の伝統を創始し、発達させたというのがその代表的な見解だ。このような見解に対して、本研究では、求婚小説の枠組みを用いることによって、家庭性のイデオロギーに回収することが出来ない女性の内面とその物語の系譜を浮き彫りにすることが出来た。その系譜の概要は以下の通りである。

### ①18世紀について

求婚小説が、18世紀啓蒙思想の時代にあつて、「友愛結婚」の理想にむけた女性のindividuation（個性化）の問題に取り組む文学ジャンルであることは既に述べた通りだが、そのようなジャンル生成を後押しした時代的な流れとして本研究が着目したのが、性的差異に関する概念変化である。それまでの男女の性的差異は、男性を典型、基準とした優劣のヒエラルキーを内包する「程度の差異（difference in degree）」であったのに対して、18世紀後半になって男性と女性の差異は決定的な「種類の差異（difference in kind）」であることが、解剖学的に「発見」されたのだ。このような新たな性差の発見が同時代を生きる男女に性的アイデンティティの問題を突きつけたことは、例えば、同時代のアメリカ文学において、服装倒錯、同性愛を連想させる同胞愛や友情などのモチーフが使用され、多様なセクシュアリティおよびジェンダーのパフォーマンスを見せるヒーロー／ヒロインが描かれることに如実に現れている。しかし、とりわけ、女性にとって、このような性的差異の概念変化は、男性の劣性モデルとしての性的アイデンティティを捨て、女性という個別の性を探究することの新たな可能性を開くものでもあった。市民革命の時代は、(Mary Wollstonecraftに代表されるのが通例であるが) 女性の権利が声高に主張される中で、「女性とは何か？」という問題が積極的な議論を呼んだ時代としても知られている。そのような議論は、単に、女性の市民権獲得に関する政治的議論だった訳ではない。それは同時に、性差の概念変更によって揺さぶりをかけられたジェンダー・アイデンティティの再定義に関わる議論でもあった。同時代18世紀末のアメリカ女性文学を、このようなジェンダー・アイデンティティに関する議論の流れで捉え、求婚小説として評価した場合、他者性に依存しない個としての女性アイデンティティを問題化する作者の意図が明らかになってきた。例えば、

Susanna Rowson の代表作 *Charlotte Temple* (1794)は、誘惑の犠牲となるヒロインを描くことによって、女性が弱く無垢で守られるべき存在であるという、いわば、前近代的な「程度の差異」によって正当化された女性の従属性を踏襲する物語であるように見えるし、そのように長く評価されてきた。しかし、性差が「種類の差異」として再定義化される時代背景に着目すると、*Charlotte Temple* の悲劇が、*Madame Beauchamp* という既婚女性が、*Charlotte* のような誘惑の犠牲者に、友情と援助を与えるを通して、妻ではなく、広く社会に貢献する市民としてのアイデンティティを獲得する物語の出発点として機能していることに思い当たるのだ。また、*Hannah Webster Foster* の *The Coquette* (1797)でも、*Eliza Wharton* の悲劇は、*Julia Granby* という未婚女性が、誘惑撲滅を目指す女性運動の先頭に立つ契機を生み出し、結婚や家庭へと向かう女性の欲望を助長するよりは、むしろ、社会意識を高める役割を果たしていることに気付かされる。18世紀末のアメリカ女性文学は、正に、女性とは、男性の劣性ではなく、知的、精神的能力において全く男性と平等であるという *Judith Sargent Murray* や *Mary Wollstonecraft* など、同時代の女権拡張論者たちが主張した女性解放の方向性、言い換えれば、男性に従属した「女性」ではなく、(英語では *person* と表記される)「人」であることの自意識に、積極的に表現を与えていたことが明らかになった。

## ②19世紀について

18世紀共和制時代の女性文学が表現を与えた女性の個性への欲望は、19世紀に入ると、男女の領域の分化に伴う家庭性のイデオロギーの影響下で半ば沈黙され、裏切られる結果となる。19世紀女性文学は、「友愛結婚」の理想に依拠することによって、家庭性のイデオロギーの要請と折り合いをつけることを選択したのである。事実、19世紀女性文学の主流を形成する家庭小説や感傷小説は、女性が主体的に生きるためのノウハウを実践的に示すことに多大なる関心を寄せながらも、決して幸福な結婚の結末を逸脱することを好まなかった。しかし、このことは、家庭小説や感傷小説によって、18世紀の女性たちが抱いた個性への理想そのものが立消えになったことを必ずしも意味するものではない。というのも、個性への理想——それは言い換えれば、他者性に異存しない「私」であることへの憧憬ともいえるものだが——は、19世紀女性文学において、結婚や家庭といった異性愛制度そのものに揺さぶりをかける女性の内面へと確実に深化し、存続していることを確認することができるからだ。例え

ば、*Catharine Maria Sedgwick* は、19世紀感傷小説の伝統の創始者のひとりであると評価されているが、彼女の作品は、幸福な結婚に通じる模範的な生き方の実例を示すヒロインに特徴がある。しかし、そのようなヒロインを取り巻く登場人物の中には、*Redwood* (1824)の *Debora Lenox*、*Hope Leslie* (1827)の *Esther Dowing*、そして *Married or Single?* (1857)の *Martha Young* など、結婚せずに自立した生活を選ぶ女性たちがいる。彼女らは、物語の中で、社会的に虐げられた者に援助の手を差し伸べ、正義に貢献する役割を演じることで、家庭に囚われない女性経験の可能性を実演することで、家庭性のイデオロギーに密かに対抗している。また、*A New-England Tale* (1822)の *Crazy Bet*、*The Linwoods* (1835)の *Jessie Lee* など、18世紀誘惑小説のヒロインの悲劇的な人生を再演するかのような悲恋の物語を紡ぎだす女性たちも、結婚や家庭が必ずしも女性の自己実現の場ではないことを暗示する役割を担っている。*Sedgwick* の作品は、18世紀共和主義時代の個性への女性的欲望と、19世紀の家庭性イデオロギーの要請の狭間に揺れる女性作家の葛藤の産物に他ならないのだ。女性文学の伝統を、19世紀起源に据える歴史観は、18世紀から19世紀へのジェンダー・イデオロギーの移行に伴う女性たちの内的葛藤という点に関して極度に楽天的であった。女性文学における18世紀から19世紀への流れを「反動」という言葉で表現することによって、断絶しか見出せなかった既存の女性文学史観に対して、本研究では、家庭性イデオロギーに対する女性作家たちのアンビバレントな反応の中に、18世紀と19世紀の間の「継続」を示唆することができたと考えている。事実、*Sedgwick* 以降の19世紀女性文学の展開を求婚小説の枠組みで考察してみれば、本質的な文学的関心が、家庭性のイデオロギーに従順であることではなく、むしろ、家庭に回収されない女性の内面性を描き出すことで、結婚や家庭などの女性の主体性を拘束する異性愛制度の正当性を揺るがすことの方にあるようにさえ見える。例えば、1850年代は、これまで「女性の50年代」と称される感傷小説の最盛期だと考えられてきたが、実際には、離婚の制度化が進み、家庭小説や感傷小説が依拠してきた結婚制度が崩壊の危機に瀕しているという認識が顕在化した社会状況にあって、女性文学も理想化された結婚のヴィジョンだけではなく、一步、家庭という私的領域に踏み込んだ形で、離婚、家庭内暴力、家庭崩壊などの生々しい家庭生活の実態に迫る作品を生み出し始める時期でもあるのだ。*Harriet Beecher Stowe* といえ、家庭小説の代表的な担い手と評価されるが、そのような *Stowe* でさえ、

*The Minister's Wooing* (1859)、*Oldtown Folks* (1869)、そして、*Pink and White Tyranny* (1871) など、不義の恋心、家庭内暴力、そして、家庭崩壊などの実態を暴露する作品を書いている。そのような Stowe の異性愛制度に対する違和感、不信感は、同時代では、E. D. E. N. Southworth、Louisa May Alcott が確実に共有していたし、その後の世代に至って、Mary E. Wilkins Freeman、Kate Chopin、そして Charlotte Perkins Gilman などの世紀末女性作家たちの作品において、より広いリアリズム小説の流れの中で一気に可視化することになる。我々は長く女性文学といえば、感傷性や家庭性のイメージで捉えてきたけれども、本研究は、そのような既存の理解に対して、求婚小説という新たな枠組みを採用することで、18 世紀共和制時代から 19 世紀末に至る女性文学の歴史を、一貫した流れの中で捉えることができる、その可能性を例証することができたと考えている。

## (2) 今後の展望

本申請の研究は、上記 (1) に詳細を示したように、18 世紀共和制文化のパラダイムを利用して、19 世紀中心的な既存の女性文学の歴史観を流動化する視座を構築する試みとしては一定の成果を挙げたと自己評価している。しかし、学会発表や論文を通して成果を発信する、という当初計画の実行については反省すべきところが多く残った。本研究の成果は、広い意味では、女性文学史の再編成であるが、細部においては、Catharine Maria Sedgwick や Harriet Beecher Stowe といった代表的な女性作家の評価の見直しにも通じる問題、そして、Mary E. Wilkins Freeman や E. D. E. N. Southworth のような文学史の周縁に追いやられている作家を女性文学の主流へと再配置することに通じる視点を含んでいるため、今後も継続的に、そして、着実に、本研究の成果を各論としても発信してゆくことで、女性文学研究を活性化させることに更に貢献できるものと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ①若林麻希子、テンプル家の食卓——クーパー『開拓者たち』のナショナリズム、青山学院大学文学部『紀要』、査読無、第 52 巻、2011 年、77-90、
- ②若林麻希子、The Revolt of Female Appetite: Mary E. Wilkins Freeman and Women's Literary Realism、*The Japanese Journal of American Studies*、査読有、第

21 巻、2010 年、31-48、

- ③若林麻希子、『牧師の求婚』における誘惑モチーフ——ハリエット・ビーチャー・ストウによる感傷小説批判、*アメリカ文学*、査読有、第 70 巻、2009 年、1-8、

[学会発表] (計 2 件)

- ①若林麻希子、共和国アメリカの歴史の在り処を求めて——ディートリッヒ・ニッカーボッカーのニューヨーク探索、青山学院大学英文学会、2008 年 12 月 6 日、青山学院大学、
- ②若林麻希子、『牧師の求婚』における誘惑モチーフ——ハリエット・ビーチャー・ストウによる感傷小説批判、日本アメリカ文学会、2008 年 10 月 11 日、西南学院大学、

[図書] (計 2 件)

- ①若林麻希子、彩流社、『アメリカン・テロル』、2009 年、53-72
- ②若林麻希子、春風社、『書簡を読む』、2009 年、33-56

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

若林 麻希子 (WAKABAYASHI MAKIKO)  
青山学院大学・文学部・准教授  
研究者番号：50323738